



木曽林務課だより 11月

御岳山や中央アルプスの雪化粧の姿が見られるようになり、冬本番が近づいてきました。上松町の国有林で行われた造林地での獣害対策現地検討会の様子を紹介します。

造林地での獣害対策の現地検討会を行いました

長野県の鳥獣による森林被害では、二ホンジカの被害が最も大きく、被害対策とともに、捕獲対策による個体数の低減が急務となっています。これまでシカが少なかった木曽地域においても、近年シカの生息密度が上昇し、造林地などでの防除対策が重要になっています。また、防除対策と両輪となるシカを増やさないための捕獲対策でも、木曽営林署と木曽猟友会で、国有林内でのシカの捕獲に関する協定が締結され、取組みが進んでいます。

そうした中、木曽森林管理署、南木曽支署及び、木曽地域振興局が連携して、管内の町村を含めた造林地での獣害対策現地検討会を令和3年11月24日に上松町の小川入国有林で開催しました。

長野県林業総合センター育林部の研究員から、まず加害種を確認して、効果のある対策を組み合わせることが、獣害対策の基本であることの説明を受けてから、それぞれの対策についての現地検討を行いました。

防護柵が設置されている造林地では、柵の構造とともに、メンテナンスなどの管理を考えた資材や設置ルートを選択が必要であり、特に継続的な管理が必要だという説明がありました。その後、参加者全員でシカの角がかりにくく、ウサギも侵入しにくい目合いが5cmと細かいネットが使用され、その裾がしっかり固定されている設置方法を確認し、意見交換を行いました。

忌避剤処理が行われている造林地では、食害されたくない主幹になる部分にしっかり忌避剤を付着させることが重要であること、忌避剤は、シカ、カモシカにとって嫌な味であることで食害を防ぐため、シカの密度が高くなると効果が下がることなどの説明後、処理方法の実演と作業体験を行い、質疑が交わられました。

まだシカの密度が高くない木曽地域において、今後シカの被害が増えないようにしていくために必要な対策を考える良い機会になりました。

現地での説明



適切に設置された防護柵



忌避剤散布処理の体験